

2016 日本青年メディア関係者訪中団

参加者の感想

【イノベーション発展】

○中国の会う方々の「自信」が最も印象に残っています。その全てが真実かどうかは置いておいても、日本人が忘れかけている「自尊心」を強く持って前へ前へ突き進んでいる、ということを感じました。また、日本との関係もより良くしていきたいと願っていて、個人レベルで話をすると、その考えが強くなるのだということも分かりました。それぞれの機関の方々とはわずかな時間しか接することが出来ませんでした。続けて会話をしていけば、お互いを理解し合えることが出来ると感じました。訪問先で一番感銘を受けたのは、DJI です。スタッフが皆さん若く、活気に溢れていて、その躍進ぶりには焦燥感すら覚えたほどです。日本人スタッフの方も日本の企業でエンジニアをされていたが先輩と共に退職し、DJI に入られたとのことで、日本の企業では成しえないことが中国では実現されるのか…と残念でもありました。日本人のどこかで無意識のうちに芽生えていた中国を見下す気持ちが、今の日本と中国の経済発展の差を産み出していると感じました。日本人はもっと謙虚にこの「現実」を受けとめ、正しく理解し、中国と共に発展する道を早急に選択し具体的に動き出さないといけないのでは？と思います。

今回の訪中が単なる儀式的な形で終わらないように、私自身も会社に戻って何をすべきか考え、行動したいと思いますし、今回関わって頂いた中国側の方々にも交流だけではない次のステップを真剣に取り組んで頂きたいと思います。

私たち訪問団が国交を動かすくらいのモチベーションで今後臨んでいきたいです。また、我が社はラジオ放送局であるので、一般のリスナーに向けた中国の現状の正しい理解という面でも、情報発信方法（収集方法も含めた）も今一度見直したいと考えます。出来れば、中国メディアの方々とも面会できたので、お互いのメディアを通じた交流が継続的に出来ないか、模索したいし、協力を仰ぎたいです。

今回の訪中団は5年ぶり2回目、とのことですが、私達の訪問が中国政府や日本の外務省に一定の評価を受け、毎年開催され、多くの日本の若者のメディアの人間が、中国を訪問する機会が得られるよう、心より祈っております。

○北京、広州、深圳を巡ったが、首都北京と南方の都市で環境がまるで異なる点が印象的だった。気候は勿論、習慣や人柄なども違いがあると感じた。北京では所謂、日本でよく報道されているような姿、風景をよく見かけた。型にはまったような話の内容、形式を重んじる挨拶などを見てそう感じた。また大気汚染についても、報道で触れて持っていたままの印象だった。一方、南方では人が開放的で、ビジネスに関しても柔軟に取り組んでいる印象を受けた。日本人が余りイメージを持っていない部分の中国について発信したいと思った。

○北京、広州、深圳を訪問し、高層ビルの多さや整備された高速道路、大規模な商業施設など、予想以上に経済発展を遂げていることにまず驚いた。中国が日本の GDP を抜き、世界 2 位の経済大国になったということはデータで知っていても、まだ日本の方が「進んだ国」であると漠然と思っていたが、そうした認識は改めないといけないと実感した。今後、更に経済成長が続き、米国を凌ぐ大国になったとき、隣国として日本はどう付き合うべきか。中国は将来を見据え、アフリカなどと関係を強化したり、AIIB を設立したりして、国際的な秩序づくりでリーダーシップを取ろうとしている。20 世紀に米国が果たした役割を担おうとしているとも捉えられ、日本の立ち位置も難しくなると感じた。

中国企業の製品には「安かろう、悪かろう」のイメージがあったが、ファーウェイを見学し、そうした考えは古いと思った。各地から多様な人材を集め、日本企業を上回る研究開発資金を投じ、新しいものを生みだそうとしている。決して欧米や日本のコピーではないと感じた。

我々、日本メディアは中国に関連する話題をネガティブに報じる傾向があると訪問先で指摘され、確かにそうかもしれないと思う部分もある。それは記事を書いている記者が、日本の政府当局者に話を聞いていたり、日本のメディアの情報をベースに中国の情報を学んだりしていることが背景にある。日中両国の記者が、より相手国への知見を深めれば、より実態に近い報道が増えるのではないか。

そうした意味において、今回の交流事業の意義はとても大きいと感じている。

○中国という国はとても一言では言い表すことのできない、複雑な国だということがよく分かった訪問だった。例えば、発展という面では、欧米、日本の資本主義国とは比べられない位のスピードとスケール、ダイナミックさで成長を遂げ、IT 技術やドローンといった先端技術の開発も活発で、これからの可能性を大いに感じた。また、国民も強くなっていく経済に自信を持ち、今日より明日は良くなる、チャイナドリームをつかもうといった前向きな強烈なエネルギーを発散させている。しかし、その一方で、中国の抱えている矛盾というのも無視できない段階に入ってきていると感じた。例えば、庶民ではとても購入できないまでに高騰した不動産やどんどんと上がっていく物価がその象徴で、産業においても、民間のファーウェイや DJI といったグローバル企業が育っている一方で、国有企業の非効率的な経営や、銀行の不良債券は資本主義国では考えられないようなレベルでもある。また、メディアも私が見聞きしたところによると、政府の介入は習政権になってより強まっていて、言論の自由があるとはとても言えない状況とのことだ。こうした矛盾がいつかはじけるのか、それともこれまでと同じように中央が巧みに舵を取って成長を続けていくのか、私が中国で会った人の間でも意見が分かれていた。しかし、そのどちらの結果になっても、中国という国はこれから日本にとってま

すまず重要になることはあれ、無視できる存在になることは無い。

そうした意味で今回、中国の様々な所に行き、多くの人と交流して今の生の中国を肌で感じられたことは自分にとって何物にも代え難い経験になったと思う。最初に書いたとおり、中国とは複雑な国だと強く感じた。私が日本に帰って上司や同僚、友人や家族に伝えたいことは、中国とは複雑で多様な面がある国だということで、決して一面や特定の事象だけを取り上げて考えるべきではなく、他の面、いい面、協力できる面を同時に考えていくことが必要だという事だと思っている。

【グリーン発展】

○研修前、中国に抱えていた印象は、強権的、強引、世界第2位の経済大国、経済力に裏打ちされた軍事大国といったイメージが強かった。今回の訪中を通じて、そうした一面的な印象は改善され、共感、共有できることと、共有できないことの線引きが、より明確になった。

共有できたことは、お互いひとりひとりの人間として、尊敬し、信用できる相手だということが分かった。客人に対するもてなし、理解を得ようと熱心に説明するガイドさん、受験や就職、子育てなど、同じような悩みをかかえ、そこに向き合おうとしている姿勢などについては、大いに共感でき、分かち合えらと思った。

一方で、国家体制の違いによる自由や民主主義、報道のあり方などの価値観については、絶対的に分かり合えない溝のようなものを痛感した。そこはもう、突っ込んで議論しても仕方ないこと、とあきらめることも多々あった。

その上で、様々な民主主義的価値観に縛られるあまり、挑戦する前に諦めたり、そもそも挑戦をしようとも思わずに回避する、日本人の自主規制ぶりを改めて気づかれさた。どの中国人も「中国はその先も絶対うまくやれる」と、半ば盲信的に言い切る楽観主義に、自分たちがいかに悲観的なのかと、度々反省した。

特に、急速な開発が進む貴州省の様子を見て、明らかに人の数が少ない点では、嘘くささと、不良債権化への不安を感じずにいられなかったが、人口十倍の中国は、そうした日本人の心配は不要かもしれないとも感じた。

○訪中前の中国のイメージは「三国志」「中華料理」「麻雀」のほかに「自由にモノが言えるのか」などと漠然としたものだった。一方で、4千年の歴史を持つ人口13億人の国には多様な文化があるはずだと思っていた。実際に訪れてみて痛感したのは、やはり実際に訪れて、現地の人と仲良くなる必要があるということだ。「自由にモノが言えない」かどうかは結局わからなかった。本当に中国で今起きていることを良しとしている人もいれば、本音では批判的にみている人もいると思う。何しろ13億人もいるのだから。本音を聞くにはやはり仲良くなれないといけないし、それは記者の本来の仕事で、どこの国でも、誰に対しても行う普通の仕事だ。中国では一筋縄ではいかないかもしれ

ないが、それも含めてこの国の魅力で、奥深さに強く惹かれた。

また、苗族の村の視察では、当初はもっと生活感のある地域と期待していたが、実際はかなり観光地化されており、当初は少しがっかりさせられた。しかし、現地の人の話を聞き、「出稼ぎに行かずに済むようになった」「所得が上がったからこそ伝統文化が守られる」との内容に驚かされた。民族の自主性によって、こうした方針を採用したのであればそれも一つの選択肢と言えると思った。

「幸せ」や「豊かさ」の価値観は、国、民族、個人によって大きく異なる。他者を見つめる視点をどこに置くべきか、考えさせられる良い機会とった。自由にモノが言えない（かもしれない）中国と、自由にモノが言えても周囲の考えを忖度して発言を控える日本との違いも考えさせられる。

他にも「おもてなし」とは何かということも気にかかった。日本より中国の方がよっぽど相手の感情に訴えかけるおもてなしではなかったか。

いろいろ考えさせられることが多いのだから、メディアで働く若手はぜひ一度中国を訪れるべきだと強く感じた。

○経済発展と環境保護の両立に向けた取り組みが印象に残った。貴州は森林カバー率を2020年までに60%にするという説明を貴州日報の記者から聞くことができたが、本当なら面白い取り組みで、もっと取材してみたいと思った。

中国の環境汚染は深刻で、日本の1970年代の公害が起きたころのイメージが強かったが、貴州が目指していることが本当に実現できるなら、貴州では環境汚染が深刻化することはそれほどないと思う。

少数民族の保護政策も大変興味深く、紙面でも紹介できればと考えている。訪問した苗族の村と同じような開発が今後どこまでできるかは分からないが、少数民族の文化や習慣を活かして観光業として発展できるなら少数民族の人たちにとっても悪いところはないと思う。壮大な実験として今後も注目していこうと思っている。

貴安新区も国が行う実験としてウォッチしたい。日本でも特区が各県にできてきているが、規模が違うのとスピードがあまりに違うので、帰国したら日中の違いについても取材してみたいと考えている。

○私はラジオ局の人間なので、中国国際放送さんへの訪問が印象深く残っています。ここで感じたことは選んだコースのテーマであるグリーン発展全体のことにも、その他、個別の他の訪問先の全てに共通すると思うのですが、古い物と新しい物を、どう組み合わせ、新しい未来型思考を生み出すか、という大きな課題に、本当に上手く向き合っていると感じました。一步を踏み出す勇氣、これが、今の日本の、特にラジオ業界には必要で、そこが一番欠けているところかもしれません。なかなかすぐに、楽観的に、何でもやってみよう、とはならないかもしれませんが、時代を大きく変化させるには、大事

なことです。日本という国の中で、日本人の国民性に合ったやり方で、次のステップにつながる方法を模索する、大きなヒントを得たように思います。日本人は心配性なところがあるので、少くくは、気持ちをオープンにして、大胆になってもいいのかもしれない。中国人の方に悩み相談をすると、一瞬で解決しそうな…仕事面だけでなく、個人的に考え方が、この一週間でおおらかになった気がします。